

先川直子（目白学園女短大）

〔目的〕 わが国の近代における、和装素材としてのヨーロッパからの毛織物の導入、および洋服と和服との関わり合いを考えると、男性用のインバネスと女性用の吾妻コートという2種類の衣服の、明治中期から後期にかけての存在は無視できない。ここでは、それらが和装用の外套として採り入れられ普及していく過程を調べることによって、和装における洋服の導入の一つの事例を明らかにしようと試みた。

〔方法〕 明治22年2月の創刊以来、大正初期まで毎月1～2号ずつ発行されていた雑誌『風俗画報』の1号から464号における記事や挿絵と『東京朝日新聞』の明治20年代から40年代にかけての記事と広告を主な資料とし、『白木屋三百年史』等の、それらの衣服に直接関わってきた商店の社史を2次資料として、さらに広告史関係の書物と当時の被服学や裁縫の教科書を補足資料として用い、インバネスと吾妻コートの実態を探った。

〔結果〕 英国の発祥地名に因んだインバネスと、わが国で考案された吾妻コートは、共に和服の上に着用する外套として、明治後期には広く用いられているが、和装用としての地位を確立した後も、それらは新聞や雑誌では背広やオーバーコート等の後に記載されているのが常であり、宣伝広告を出しているのは洋服店であるなど、洋服としての扱いであることが分かる。しかし、吾妻コートの場合、素材は毛織物の他に伝統的な絹織物も使われ出し、美也巧コート等も出現しており、二重廻しとか鶯などと呼ばれていたインバネスにも、獨逸トンビや烏、あるいは吾妻インバネスや都インバネスが登場するなど、元来の形式は、和装用の衣服としての変遷の過程で、かなりの変化をしていると言える。